

時を戻せることができるならば ― 逝ってしまったお母さんへ贈る手紙 ―

北村 耕一 (五十七歳)

「きのうは、母の日でした。ぼくは、円のかざりをあげました。おかあさんとおとうさんのへやは二かいです。おかあさんのへやに、びょうではめました。そうして おとうとのみつると あんじん山でしゃせいをしました。かえってきてからアイスクリームをかってもらいました。」

おかあさんは、やさしいときも、おっかないときもあります。きのうは、おおそうじだったらしく、うちへ かえってきたら きれいになっていました。まもるとおばあちゃんが、かだんをつくっていました。」

お母さん、覚えていますか。この作文は今から四十九年前、私が小学校三年生の時に書いたものです。本棚を整理していて見つけました。取っっておいてくれたんですね。

一月十四日、私はいつもの通り、朝六時四十五分に家を後にしました。お母さんの部屋はまだ暗かったので、声をかけませんでした。今、そのことを悔やんでいます。妻が声をかけた時には、既に意識がなかったそうですね。その後、家族や親族が集まる時間、私や妻に心の準備をさせる時間を作ってくれるために、五日間、頑張ってくれました。ありがとうございました。辛い時間でした。三キロ痩せました。(来世で笑っているかな?)

突発性の脳出血でしたから、お母さん自身も予想していなかったと思います。前日までごく普通に生活し、会話をしていたので、家族、親族、お母さんの友人、ご近所の皆さん全員、信じられませんでした。

お母さんは短大卒業後、お父さんと結婚し、私たち兄弟を産み、育ててくれました。子育てと共に町内会、学校のPTA役員、消防・警察・社会福祉関係といった地域社会の仕事に関わっていたので、大変忙しかったと思います。しかし、私たち兄弟の前では、いつも明るく、元気に、優しく、時には怖い存在でしたね。

私が仕事に就くようになり、愚痴をこぼすと「仕事を頼まれているうちが華だよ」と励ましてくれたり、「他者から言われて嫌だと思っことは他者に言っではいけないよ」と諭してくれました。未熟な私は、今でもお母さんの言葉通りに振る舞っていません。また、叱ってもらいたい……でも、叶わないことですな。

三月六日、お母さんは、好きだったお父さんやお祖父さん、お祖母さんの眠る我が家のお墓に入ります。この手紙を書いている時も涙がでてきてしましますが、北村家の長男として、妻と力を合わせて家とお墓を守っていきます。来世で見守ってください。